

キャンパス名	千葉キャンパス				
授業番号	10589002				
授業名	環境保護と野外活動 B	形態	講義	単位	2
担当教員	亀井 尊				
開講学期	2019年度 後学期	曜日・時限	月曜3限		
授業目的	環境をグローバルな視点で捉え、身近な地域で行動できる人材育成を図る。環境を考えるに当たっては自然科学的な知識をもって自然を見つめ、活動に当たっては環境教育の手法を取り入れて行う。また、常に身近な環境に興味関心を持ち、人間の持っている感性を豊かに育てつつ持続可能な開発を目指す環境教育活動を積極的に実践する。				
授業内容	環境を学ぶに当たっては、先ず私たちが居住する地球環境を学ぶ。そこは大気圏・水圏・陸圏が存在し、70億を超える人間が経済活動を通して日々自然環境と関わりながら生活を送っている。「自然と人間との関わり」をテーマにして、人間にとって快適な環境とはどうあるべきかについて主体的・対話的で、深い学びを目指す。特に自然保護の視点に立ち、「緑」環境について実践的で活動的な授業を展開し、野外活動に応用できる技能を身に付ける。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ○地球のメカニズムを正しく理解し、人間の経済活動によってさまざまな環境問題が生じている現状を理解する。 ○地球環境の豊かな恵みを上手に利用しつつ、再生可能な循環型の環境を構築する方法を身に付ける。 ○野外活動に必要な基本的な知識と技能を身に付ける。 ○「Think Globally, Act Locally」を掲げて、学習した内容を地域に還元できる能力を身に付ける。 ○防災・減災の知恵を歴史から学び、災害に対して適切な行動がとれる能力を身に付ける。 				
ディプロマポリシーとの関連性	<DP1-(4)> 人間・文化・社会・国際事情あるいは自然等について幅広い知識と理解を有している。				
授業形態	授業の前半を講義形式で行ない、後半は実習や作業を通してアクティブラーニングを実施する。毎回テーマごとに身近な地域の環境問題や環境保全に関する取組みを紹介する。例として、埼玉県所沢市「トトロの森とナショナルトラスト運動」など。また、野外活動とは、キャンプなどの自然体験を単に示すだけでなく、実際に授業の中でダイヤモンド富士観覧会、樹木観察会など自然観察会を2回実践してみる。さらに、身近にある素材で簡単なおもちゃ作りを紹介する。 教科書を特に指定しないため、随時資料を配布し、視聴覚教材などを適宜使用することで授業が理解できるように工夫し、授業での重要事項は振り返りシートを用いて深める。				
事前・事後学習の所要時間	講義時間30時間（2時間×1コマ×15週）＋事前事後60時間（第1～15回目授業までの総合計）				
テキスト	各回の講義内容を踏まえた上で、テーマごとの資料および視聴覚教材を使用するため、テキストは特に指定しない。				
評価方法	本講義の到達目標に達しているかどうかをはかるための授業内試験と野外活動での課題、アクティビティーで作成した作品から評価する。				
評価基準	野外活動など授業内容に関する課題や作品30点、授業内試験70点の合計100点				
試験・レポート等のフィードバック	各授業回で提出された課題や学習した内容を振り返るシートについては、次の授業回で解説・評価を行う。授業内試験は第14回目に60分で実施し、その結果は次の授業回で解説を行う。欠席者は16回目に試験・解説を行う。				
注意事項及び履修条件	事前・事後学習を欠かさないこと。				

S：100～90、A：89～80、B：79～70、C：69～60、D：60未満

第1回	
事前学習	シラバスを読み、授業目的、授業内容、到達目標、事前・事後学習の所要時間、評価方法、評価基準などを確認しておくこと。また現在、地球上で発生している地球環境問題について調べておくこと。
授業内容	<p>生命の生存が可能な「地球環境」を自然科学から理解する。地球には、①大気圏 ②陸圏 ③水圏が存在する。そのメカニズムに触れ、偶然の重なり合いによって生命が存在する意味を考える。と同時に、繊細で壊れやすい環境でもあることを理解する。この地球に生態系の頂点に君臨する人間の飽くなき経済活動によって環境が激変している状況を学び、この対応策を考える。また、環境教育の目指す持続可能な教育「E S D (EDUCATION FOR SUSTAINABLE DEVELOPMENT)」とは何であるのかを理解する。</p> <p>アクティビティー：①地球誕生46億年と生命誕生の経過を教室で実習し、生命の誕生が1日に換算すると何時何分何秒になるのかを計算で求め実感する。②「火起こしの実際」を体験する。</p>
事後学習	地球誕生46億年の中で人類発祥はほんの一瞬にすぎない。この間人類は高度な文明を築いたものの、現在は地球温暖化、砂漠化、オゾン層の破壊など深刻な環境破壊状況にあることを理解できたかを振り返りシートで確認する。 配布された資料「地球環境『2019年基礎編・応用研究編』」を読んで、環境保護の基礎的な知識を深

	めておくこと。
参考文献	地球教室「2019基礎編・応用研究編」朝日新聞環境教育プロジェクト 自然を守るとはどういうことか（守山弘）人間選書 なぜ地球の生きものを守るのか（日本生態学会）文一総合出版

第2回	
事前学習	人口問題を先進国と発展途上国に分けたとき、それぞれの地域や国で発生する諸問題について調べておくこと。また、自然環境の変化は自然そのものの活動に加え人類の経済活動によるところが大きいことから、地球環境にやさしい活動とはどういうことをいうのかをレイチェルカーソン著「センス・オブ・ワンダー」を読んで考えてみる。
授業内容	地球の人口は現在76億人を超え、世界各地で食糧・エネルギー問題から人種・民族・宗教問題にいたるまで複雑に入り組んで政情不安な地域や国があることを学ぶ。人類は高度な文明を築き上げ、産業を発達させ、物質的に豊かで安定した生活を営むことができるようになった。しかしその結果、繊細で、豊かな自然環境が大きく改変、破壊されるようになった。自然が破壊されることで、人間の感性や人間性をも失うことに繋がる懸念が生じている。そのため地球温暖化をはじめとして、さまざまな環境問題を正しく理解し、環境にやさしい生き方を創造することを学ぶ。 また、幼児期における自然体験の重要性を論文で確認し、生命あふれる、欠けがえのない美しい地球環境は「先祖からの贈り物ではなく、子孫からの預かりもの」として捉えることが重要であることを学ぶ。 アクティビティー：自然観察会の実際「どんぐりを炒って食べてみよう」
事後学習	最大の環境破壊は貧困地帯で起こる内戦や戦争である。その原因と考えられるのか、人口問題や食糧問題、民族・宗教問題などであることを理解できたか、また幼児期における自然体験が豊かな感性を育て、自然に優しく接することができることを振り返りシートで確認する。論文（英文）を読むことで環境教育の現状を理解すること。
参考文献	センス・オブ・ワンダー（レイチェルカーソン）佑学社 こどもを育む環境 蝕む環境（仙田満）朝日新聞社 2018

第3回	
事前学習	持続可能な開発目標「SDGs」とは何かについて調べておくこと。また、日本の独立法人国際協力機構「JICA」の事業や目的について調べておくこと。
授業内容	「私たちが目指す世界『SDGs=SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS』、そして私たちが未来をつくる」をテーマに持続可能な開発目標について学ぶ。2001年から2015年までのミレニアム開発目標「MDGs」に触れ、目標と成果について理解した上で、2016年から2030年までに「17のグローバル目標と169のターゲット」について一つひとつ理解を深めていく。目標1. 貧困をなくそう 目標5. ジェンダー平等を実現しよう 目標10. 人や国の不平等をなくそう 目標14. 海の豊かさを守ろう 目標16. 平和と公正をすべての人になど JICAボランティア事業の目的を学び、青年海外協力隊の活動内容を知る。～「いつか世界を変える力」になる～ アクティビティー：簡単な材料でSDGsグッズ作り
事後学習	持続可能な開発目標「SDGs」の17の目標とアクションガイドを参考にして、どの目標だったら実行できるかを考える。また、青年海外協力隊の一員になった場合どのようなボランティア活動に参加できるか考えておくこと。
参考文献	私たちが目指す世界（JICA）環境教育とESD（日本環境教育学会編）東洋館出版社 江戸のエコ生活（菅野俊輔）青春出版社

第4回	
事前学習	世界遺産とは何かを調べ、日本の文化遺産と自然遺産はいくつ指定されているか、指定された年代順にその内容をまとめてみる。また、2017年6月に群馬県利根郡みなかみ町がユネスコのエコパークに指定された。ユネスコエコパークとは何であるのかを調べておくこと。また、ジオパーク銚子についても同様に調べておくこと。
授業内容	世界遺産についてその成立と文化遺産と自然遺産の相違点を書籍「世界遺産を問い直す」から考える。また、ユネスコエコパークとは、人が自然を守りながら自然について学び、自然と共に生きていく世界的なモデル地域のことをいう。2018年7月現在の登録件数は、122カ国686件、日本では2017年6月現在みなかみユネスコエコパーク登録を含め9つの地域が登録されている。授業ではみなかみエコパークについて、その目的、なぜ登録するのか、世界自然遺産との違いは何か、エコパークの問題点とは何かなどを学ぶ。1973年、千葉市は青少年の健全育成を目的にこの地に高原千葉村を設置し、自然体験の場として毎年市内の中学2年生が訪れている。しかし、2019年3月をもって廃止が決定された。この問題について考えてみたい。また、ジオパークについては銚子ジオパークを例にして、自然景観の保護・保全、観光振興・地域振興、教育活動について解説をする。 アクティビティー：①木の実の採集（食べられる実と毒の実の見分け方） ②身近な植物でお茶
事後学習	日本自然遺産の白神山地、みなかみ以外のユネスコエコパークと銚子以外のジオパークについて、それぞれ一つずつ調べてみよう。小中学校時代の自然教育活動（林間学校・修学旅行など）、それはいつ、どこで、どのような体験をし、その体験が現在自分自身の生き方にどのように反映されているかまとめてみよう。

参考文献	世界遺産を問い直す(吉田正人) ヤマケイ新書 2018 みなかみ町の自然とくらし(群馬県みなかみ町役場) 世界遺産の自然の恵み(日本生態学会) 文一総合出版
------	---

第5回	
事前学習	ダイヤモンド富士とは何かを調べ、淑徳大学ではいつ観測できるのか考えておくこと。自然保護活動の原点といわれる「尾瀬の自然」について、その自然環境や自然保護運動の中心となった団体、運動の目的などについて調べておくこと。また、日本自然保護協会の設立から今日までの活動内容を調べてみよう。
授業内容	15号館展望テラスから見られるダイヤモンド富士について、作図を通してその月日を予測する。また自然保護運動のもっとも顕著な運動は「尾瀬の自然をまもる」運動であったことを学ぶ。日本を代表する貴重な動植物が分布する日光・尾瀬国立公園に観光道路の建築が始まろうとしていたことに、多くの自然保護団体や有識者、住民が反対し、道路建設を回避した運動である。日本自然保護協会の自然保護活動の実際を学び、自然観察指導員講習会を紹介する。 「保護」意味する英単語 ①PROTECTION ②PRESERVATION ③CONSERVATIONの違いについて学ぶ。
事後学習	ダイヤモンド富士は年2回観察できる。それでは次の月日を調べてみよう。また、自宅から観察できる月日を計算してみよう。日本の貴重な自然・歴史環境が観光や開発の名のもとに改変・破壊されることに対して、自然保護団体や住民の反対活動によって阻止、変更できたことを振り返りシートで確認する。身近な地域で保護・保全すべき貴重な自然や遺跡について調べ、どのようにしたら開発から免れることができるかを考えてみよう。
参考文献	尾瀬に死す(平野長靖)新潮社 永遠の尾瀬「自然とその保護」上毛新聞社

第6回	
事前学習	緑地を保全する政策として、「ナショナルトラスト」制度とは何であるのかを調べておくこと。宮崎駿監督 映画「となりのトトロ」を思い出し、「里山の景観」とはどのようなものかを考え、舞台となった埼玉県所沢市の「トトロふるさと財団」について調べてみる。
授業内容	ナショナルトラストは、イギリスで始まった自然保護運動の一つで、多くの人々から少しずつ寄付を募り、その寄付を資金に自然や文化財を守るために土地を買い取っていく手法で自然保護を実践している。イギリス発祥のナショナルトラスト運動の歴史と現状、そして問題点を学ぶ。また、日本ナショナルトラスト運動の経緯と現状を埼玉県所沢市にある「トトロの森」を例にして、何のために緑地を保全するのかを紹介する。同時に、日本の原風景の一つとして雑木林の保存の重要性を理解する。また、東京都世田谷区で展開されている「世田谷トラストまちづくり-市民緑地制度」について映像を通して解説する。 アクティビティー：段ボール空気砲や廃材でトトロバッジを作ってみよう
事後学習	ナショナルトラスト運動によって、自然や文化財などが大切に保存されていることと里山の自然の特徴が①鎮守の森②雑木林③畑④小川と田んぼ⑤屋敷林などが一つのセットとなって存在し、これが日本の原風景であることを振り返りシートで復習する。身近な地域で貴重な自然や文化財を保存する動きがあるかどうか調べておくこと。
参考文献	森を知り、森に学ぶ(菊池俊夫・犬井正)二宮書店 ナショナル・トラスト(木原敬吉)三省堂

第7回	
事前学習	日本の森林率や植生分布を調べ、樹種の多様さが気候や地形によるものであることを調べておくこと。また、千葉県にある6つの県民の森のそれぞれの森林の特徴や動植物の分布などを調べ、森林の役割や問題点を考えておくこと。さらに千葉市の緑地保全政策として、市民緑地制度、市民の森制度とは何かを調べておくこと。
授業内容	日本の森林・林業について、地形・気候・土壌からその特徴を学ぶ。日本の森林率、天然林と人工林の割合、森林の役割、花粉症はなぜ発生するのかを具体的に学ぶ。また、温量指数と乾湿指数から千葉県の植生がシイ・カシ類などの「照葉樹林帯」に属することを理解し、そこで見られる森林植生と動植物の分布的特徴を知る。 身近な緑に親しむため千葉県は県内6ヶ所に県民の森を設置し、郷土の自然を保護・保全しつつ、自然観察や野外レクリエーションを楽しむ場として開放されている。また、身近な地域に残る貴重な緑の一つに「市民緑地」がある。千葉市の緑地保全政策として、特別緑地保全地区の指定や市民緑地制度、市民の森制度とは何かを学ぶ。市民の森はコナラやクヌギの雑木林からなり、地域の幼稚園児の自然体験の場となっている。 アクティビティー：①チョウの食草 ②木が育つまで(植林→下草刈り→枝打ち→除間伐→伐採)
事後学習	日本の森林の特徴や役割、木を育てることの大切さを振り返りシートで確認する。県民の森や市民の森を訪ねたとき、そこで何を体験し、何を学ぶことができるか、また身近な雑木林で子どもと遊ぶプログラムも考えてみよう。 森林経営管理法「森林バンク」について調べ、日本の林政を考える。
参考文献	水を守りに、森へ(山田健)筑摩書房 環境教育「私たちのくらしと森林」(VHS)千葉県地域整備協会

第8回

事前学習	都市緑化の代表は、街を歩いていて目に入ってくる街路樹の緑である。街路樹の役割とは何か考え、身近な地域に植栽されている街路樹を観察して、その樹種や樹木の特徴、街路樹の問題点などを調べておくこと。また、街路樹は歴史的に、いつ頃、誰が、何のために植えたのかを考えておくこと。
授業内容	街路樹が街中で枝葉を大空に向かって伸ばしてしている姿をみると、心が癒され、豊かな気持ちになる。街並み景観として、「四季折々に季節感を与え、野鳥が舞う街」などとアピールして環境に優しい政策を訴える市町村は多い。 授業では、街路樹の役割とは何かを、千葉市を例にして考えてみる。樹種の選定、樹種の管理・保全、樹種の剪定、空中架線や交通標識の問題などを学ぶ。平成28年末、千葉市街路樹（高木）の本数は46,363本 樹種では、1位イチヨウ 2位マテバシイ 3位ハナミズキ 4位サクラ 5位ケヤキが上位を占めている。 「緑と水辺の都市」を宣言した千葉市の緑化政策を学ぶと同時に、千葉市以外の各自治体の緑化推進のスローガンや近年の街路樹への動きを探る。最後に街路樹の歴史的変遷について古代から現代に至る経過を学ぶ。 アクティビティー：①ワラで籠を編む ②ツバキの草履 ③ツバキの挿し木 ④ツバキとザザンカの違い
事後学習	街路樹による都市の緑化を考えたとき、地域に根差した樹木の選定が必要になる。樹種の選定に当たっては、樹木の特徴を振り返りシートで確認する。出身地の街路樹について調べてみよう。 この時期、街中で街路樹の剪定が実施されている。そのようすを観察して都市緑化について考えをまとめてみよう。
参考文献	緑の環境デザイン（斉藤一雄・田畑貞寿編著）NHKブックス 緑の環境創造（宇都宮深志）清文社 つくって楽しむわら工芸（瀧本広子・大浦佳代）農文協

第9回

事前学習	学校緑化に向く樹木を考え、淑徳大学第一キャンパス内に植栽されている樹木について日頃から関心を持って樹種名や樹木の特徴（常緑樹か落葉樹、樹高、花の咲く時期、葉の形、実の形など）を調べておくこと。さらに公園緑化についても学校緑化同様に興味・関心をもって樹種などを調べてみる。
授業内容	自然観察会「淑徳大学 樹木10選」を実施し、樹木観察の手法を学ぶ。学内には約70種類以上の樹木が植栽され、樹齢100年を越す大木があちらこちらで見られる。学内のシンボルツリーは守衛室前にそびえるタブノキ（くすのき科）であり、胸高直径は3mを超えている。当日は、タブノキの幹を学生の手によって囲み、何人の学生が必要であったかを体験する。また、樹高の測定方法や、常緑樹林・落葉樹林の違い、花の時期、木の実について学ぶ。 自然観察の方法は五感を使ってその本質に迫ることを学ぶ。五感すなわち、視覚（目）、聴覚（耳）、臭覚（鼻）、味覚（口）、触覚（手）をいい、人間には本来それらが身につけていることから、その感性を養うことが環境教育の重要事項であることを学ぶ。また、公園緑化に使用される樹木を映像を通して紹介する。
事後学習	大学キャンパスに植栽されている樹木に関心を持ち、もっとも身近な自然として親しみ、その樹木の特徴を知り、樹木を大切にしようとする心が育ったかどうかを振り返りシートで確認する。学校緑化の目的とみどり環境は子どもにどのような教育的効果があるかを考えてみる。また、木編のつく樹木名を調べ、読みと樹木と特徴をまとめる。
参考文献	校庭の樹木「野外ハンドブック」（岩瀬徹）全国農村教育協会 地域を教える（菅原康子）人間選書

第10回

事前学習	21世紀は「水の時代」といわれている。地球上に存在する水の割合を海水と陸水にわけて調べ、人類にとって必要な飲料水はどこから得ているかを考えておくこと。また、玉川上水と武蔵野の開発について調べておくこと。
授業内容	大気大循環と地球上に存在する水資源について考える。水惑星である地球には海水が97.3%を占め、残り2.7%が陸水として存在している。陸水としてもっとも多く分布するのが氷河・残雪地帯であるため、その利用度はほとんどない。続いて地下水が存在し、河川水は水全体の0.01%に過ぎないことを学ぶ。それだけに水資源は貴重であり、急激な人口増加に対して新鮮な水の確保は死活問題となる。その貴重な水資源を日本では谷津田から湧き出る湧水によって稲を作り、生活を支え命を繋いできたことを学ぶ。谷津田は生物多様性を示し、里山の景観を示し、日本の原風景であることを理解する。事例研究として、1. 江戸時代に完成した玉川上水と武蔵野の新田開発について 2. 野川と国分寺崖線について 3. 谷津田自然観察会「大草 谷津田いきものの里（千葉市）」を紹介する。 アクティビティー：シュロの葉をつかって作品づくり
事後学習	武蔵野の自然を紹介した文学作品として国木田独歩「武蔵野」、大岡昇平「武蔵野夫人」を読んで、武蔵野の自然環境を理解しよう。また、「大草谷津田いきものの里」を訪ねて、湧水調査と生物多様性を学ぼう。
参考文献	川からひろがる世界（菊池俊夫編著）二宮書店 谷津田の自然（中村俊彦）千葉県史料研究財団編

第11回

事前学習	人類は飲料水や農業用水をどのようにして確保してきたのかを千葉県君津市や袖ヶ浦市で古くからお
------	---

	こなわれてきた「上総掘り」「川廻し地形」「二五穴」から、その読みと構造、歴史的意義などについて調べておくこと。
授業内容	水環境を考える上で、千葉県内に見られる地下水を利用した「上総掘り」について学ぶ。2005年全国地下水サミット第2回上総掘りサミットが開催された内容を紹介する。君津市大井地区は小糸川が流れる低平な水田地域であるが、河川の下刻浸食によって河岸段丘が発達し、河川水を水田に引くことが困難であった。そこで考えられたのが竹を繋いで大地に穴を掘り、地下水を汲み上げる方法で水田に水を引く「上総掘り技術」であった。また、蛇行した川の流れをトンネルで短絡し、旧河道を水田化して米の増産を図った「川廻し」、河川水をトンネルを掘って繋ぎ、農業用水を確保して米の生産を図った「二五穴」について紹介する。二五穴とは、大人一人が入れる地下水道の穴を意味し、君津の水路「平山用水」として現在も水田を潤し続け180年の歴史遺産として存在している。生きるために自然を巧みに利用してきた人間の知恵を学ぶ。さらに、日本の領海と海洋資源について考える。
事後学習	「命の水」を確保するために千葉県内で実施された「上総掘り」「川廻し」「二五穴」を理解することができたかを振り返りシートで理解する。また、日本の排他的経済水域について調べ、SDGs 14の海洋生物の保護についてまとめてみる。
参考文献	上総掘りの過去・現在・未来（上総掘りを記録する会）

第12回	
事前学習	2017年10月13日千葉県市若葉区にある加曽利貝塚が国の特別史跡に指定された。特別史跡の意味と加曽利貝塚の特徴について調べておくこと。また、市原市田淵の養老川沿いの露頭が地質年代の境界を示す国際模式地として登録され、「チバニアン」と名づけられ可能性が高くなった。チバニアンについて調べておくこと。
授業内容	今回から2回にわたって身近な歴史的環境の保全について考えてみる。歴史的文化財などの指定に関する条件や保護・保全・管理について、加曽利貝塚を例にして学ぶ。加曽利貝塚は、5000年前から3000年前（縄文時代中期から後期）に形成され、出土した土器が時期区分を決める基準になるなど考古学の発展に貢献した。昭和30年代には市民による保存運動が起こり、埋蔵文化財の保護と活用の先進事例であると評価された。「特別史跡」とはどういう意味なのかを考える。加曽利貝塚は62件目の指定であり、縄文時代の特別史跡は三内丸山遺跡などに次いで4例目となる。加曽利貝塚周辺の自然環境を地形図から考察する。また、千葉県の地層から地質年代を概観し、新生代第四紀の更新世中期（77万年～12.6万年）にあたる国際的な時代名に「チバニアン」が候補として上げられていることを学ぶ。この時期は地球磁場の逆転期であり、市原市田淵の養老川沿いの地層「白尾凝灰岩層」に見られる。
事後学習	全国の貝塚数は千葉県が744/3955遺跡と一番多い。加曽利貝塚が国宝級の遺跡であることの意味と縄文人の生活環境をまとめ、この機会に加曽利貝塚博物館を訪れ、学芸員から出土品や居住跡、貝層などの解説を受けてみよう。また、千葉県内の地質構造を調べ、砂泥互層や帯水層、鍵層などの専門用語をまとめてみよう。
参考文献	地域に学ぶ（山崎憲治）二宮書店 千葉の自然をたずねて（近藤精造）築地書館

第13回	
事前学習	地域調査の基本は地形図を読むことにある。そのために縮尺や方位、等高線、地図記号などを復習しておくこと。地域の神社仏閣を訪れ、そこで見られる石碑・石仏を調べ、石に刻まれた文字を通してその意味を考えておくこと。
授業内容	路傍にたたずむ名もなき石仏や神社仏閣に安置されている石仏に刻まれた文字を通して地域住民の地域に対する思い（息災延命や五穀豊穡など）を学ぶ。実際に石仏を調べてみると、馬頭観音像、庚申塔、如意輪観音像などが道路の辻などに見られ、何時、何のために造立されたのかが刻まれた文字から読み取ることができる。また、それらの石仏は道しるべの役割も果たしている。その造立年代の背景にははやり病（疱瘡）や天変地異（異常気象や地震、火山爆発）が集落を襲った時代と重なり、病氣平癒や自然災害のない世を願う人々の思いが伝わってくる。特に「庚申講」と「十九夜講」について、その成立と意味について深く学ぶ。庚申信仰は、60日ごとに巡る庚申の日に自らの行いを省みて寝ないで過ごす講である。十九夜講は、今日のように医療・福祉が発達していない時代に、子育てで悩む若い母親が月齢19の夜に集まる講であることを学ぶ。また、十九夜和讃の内容を理解する。 アクティビティー：月齢の計算方法（メトン周期：2019年は係数が22） 2019年12月16日（月）は、係数+月+日から、22+12+16=50 50-30=20 月齢20
事後学習	路傍にたたずむ石仏を調べてみよう。また、出身地に今日まで続く「講」があれば調べてみよう。メトン周期から自分の誕生日の月齢を計算しよう。また、二十三夜講、二十六夜講ではどのような年代の女性が集まり何を語ったのかを調べてみよう。
参考文献	庚申信仰「庶民宗教の実像」（飯田道夫）人文書院

第14回	
事前学習	雑木林を使って子どもたちに遊びを通じた環境教育プログラムを考えてみる。クヌギ・コナラの雑木林で、どんな野外活動ができるか、2～3つのアクティビティーを考えておくこと。季節や活動時間は問わない。雑木林にある自然物を利用した遊びを考え、安全で、楽しい思い出に残るプログラムを準備しておくこと。
授業内容	環境教育の実践として、子どもたちと過ごす四季の雑木林プログラムを紹介する。春：①火起こし体験 ②食べられる植物 ③竹の道具作り 夏：①草木染に挑戦 ②昆虫採集 秋：①ドングリの味比

	<p>ベ ②木の实・落ち葉の絵画展 冬：①炭焼き体験 ②狩猟体験 自然観察を通して四季の雑木林の動植物のようすを五感を使い、体験を通して学ぶ。</p> <p>雑木林を代表する樹木は、クヌギ・コナラなどの落葉広葉樹林である。これらの樹木はドングリのなる樹木で、子どもたちにとっても人気がある。秋には落ち葉が林床部を覆い、雑木林を歩く時は絨毯の上を歩いているような気分になる。色とりどりの落ち葉を集め、糊付けをして落ち葉の絵画展ができる。ドングリに小さな枝を刺して、コマを作って遊ぶこともできる。祐樹を出して木登りにも挑戦する子や木の実を集めてきて「おままごと」をはじめの子など、子どもは自然の中では自由に活発に動き回る。自然体験は感性を豊かにし、生きる力を養うことに繋がることを学ぶ。そして、子どもの頃に体験した出来事がプログラムの基本になっていることを検証してみる。第1回から第14回までの授業内容を振り返る授業内試験を60分で実施する。</p>
事後学習	環境教育プログラム「雑木林で遊ぼう」を振り返りシートで再確認し、さらにプログラムを発展させてみる。地域設定を雑木林から広範囲に設定し、ある地域の自然・歴史観察の環境教育プログラムを作成してみよう。
参考文献	グリーンセミナーたのしい自然観察の手帖（山中寅文編著）成文堂新光社 環境学習ガイドブック（千葉県環境部） みんなでつくる環境教育「学校における実践事例」（千葉県環境財団）

第15回	
事前学習	第1回から第14回の授業を振り返り、学んだことを将来に活かすための具体的な行動計画を考えてみる。繊細で、微妙なバランスが保たれた地球に生きる私たち人類は、21世紀を平和で、安全で、持続可能な発展をしていくためにはどのような生き方が求められるのか、あなたの考えを整理しておくこと。
授業内容	<p>最終授業は15回の総まとめ。地球環境を学び、自然からの恵みを得て人類は文明を築き発展させてきた。しかし、自然を酷使した結果、大きく環境が改変され、破壊されるようになった。人間生活が豊かになればなるほど貴重な自然は失われ、再生不可能な状況に陥るようになった。環境問題の悪化は人類存亡の危機であり、現在を生きる我々の責任でもある。この美しい自然を私達だけの世代が享受し、破壊の限りを尽くしてしまっはいけない。これから生まれてくる子や孫に美しい状態で手渡さなければならぬ責任がある。地球誕生の歴史から考えてみると人類の発祥は1日の終わるわずか数秒前のできごとである。その数秒間で人類は高度な文明を築き上げ、同時に環境に負荷を与え、まるで自分で自分の首を絞めようとしている。自然が破壊されることは、人間が壊れていくことと同じことであることを理解する。</p> <p>災害大国に暮らす私たちは、自然災害に対して歴史から防災・減災の知恵を学ぶことが必要不可欠な状況になった。防災・減災の知恵を紹介し、来たるべき災害に対応できる能力を身に付ける。そのためにはキャンプで不便を体験したり、被災生活の疑似体験をあらゆる機会に、あらゆる場所で体験することが重要であることを学ぶ。14回目で実施した授業内試験の解説を行う。</p>
事後学習	15回の授業を通して、「環境保護と野外活動」について十分理解できたかを振り返る。地域の自然環境や歴史環境を十分に理解したうえで、野外活動を通して地域性の解明ができたかを振り返る。学んだ知識を地域に還元できたかを自己評価する。
参考文献	歴史に学ぶ減災の知恵（大窪健之）学芸出版社 せまりくる[天災]とどう向きあうか（鎌田浩毅）ミネルヴァ書房 東日本大震災後の環境教育（日本環境教育学会）

※この他に試験が実施される場合があります。担当教員の指示に従ってください。

ディプロマポリシー	<p><DP-1> 【社会の構成員としての基本的知識・技能・態度】 社会生活で必要となる汎用的技能及び社会の一員として求められる態度や志向性を身に付けているとともに、人類の文化、社会と自然に関する知識について理解している。</p> <p><DP1-(1)> 日本語及び外国語によるコミュニケーション能力を身に付けている。</p> <p><DP1-(2)> 情報通信機器の活用に関する知識・技能を持ち、利用における法令順守の態度を身に付けている。</p> <p><DP1-(3)> 問題を発見し、課題を解決する能力を持ち、立案・実行過程で主体性を持って協働できる態度を身に付けている。</p> <p><DP1-(4)> 人間・文化・社会・国際事情あるいは自然等について幅広い知識と理解を有している。</p>
-----------	--